14.24
478

南支那及南洋調査第二百二十輯

海南島奥地旅行報告

臺灣總督官房調査課

始

凡例

一、本書は、M. Diehr が東洋語學研究報告 (Mitt. d. Sem. f. Orient. Sprachen) 中に一九〇八年報告せる海南島旅行記を飜譯せるものである。

二、斷片的であり、且つ古い報告ではあるが、海南島に關する此種の文獻の乏しき今日何等かの參考になることゝ信ずる。

三、本書は閲覽の便利を企圖し、筆寫に代ゆるに印刷を以てしたるに止まり敢て公刊せんとするものではない。

昭和九年七月

臺灣總督官房調査課

昭和九年七月 臺灣總督府 寄贈本

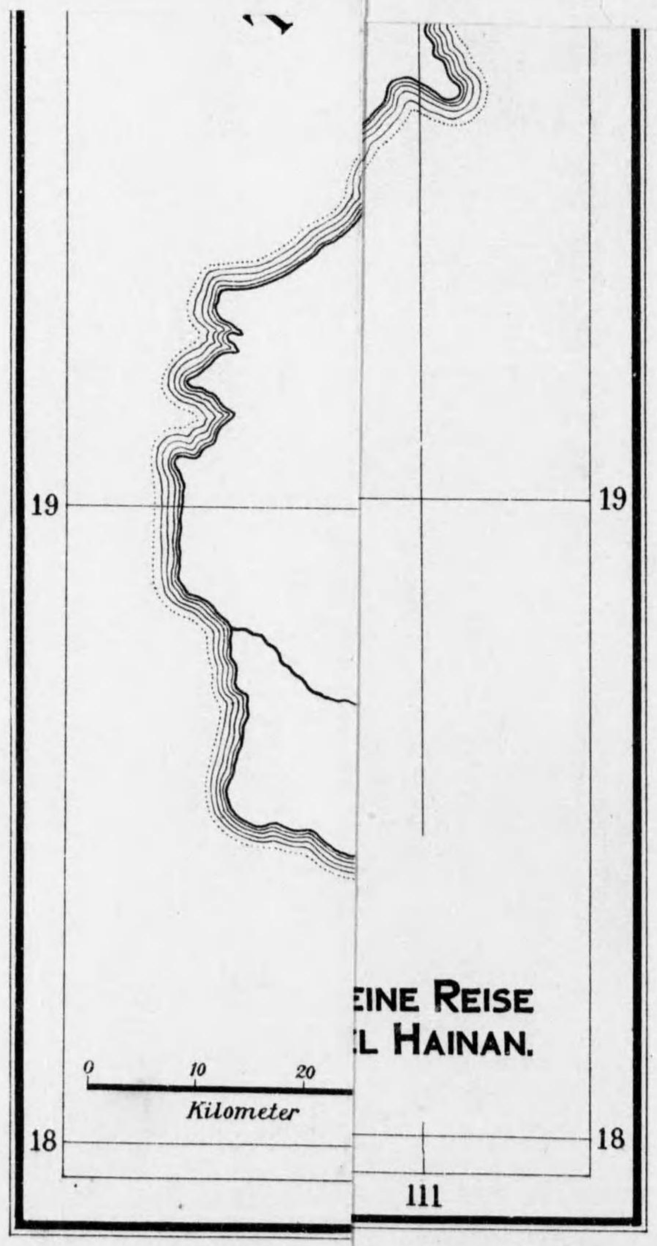
台灣總督府 寄贈本

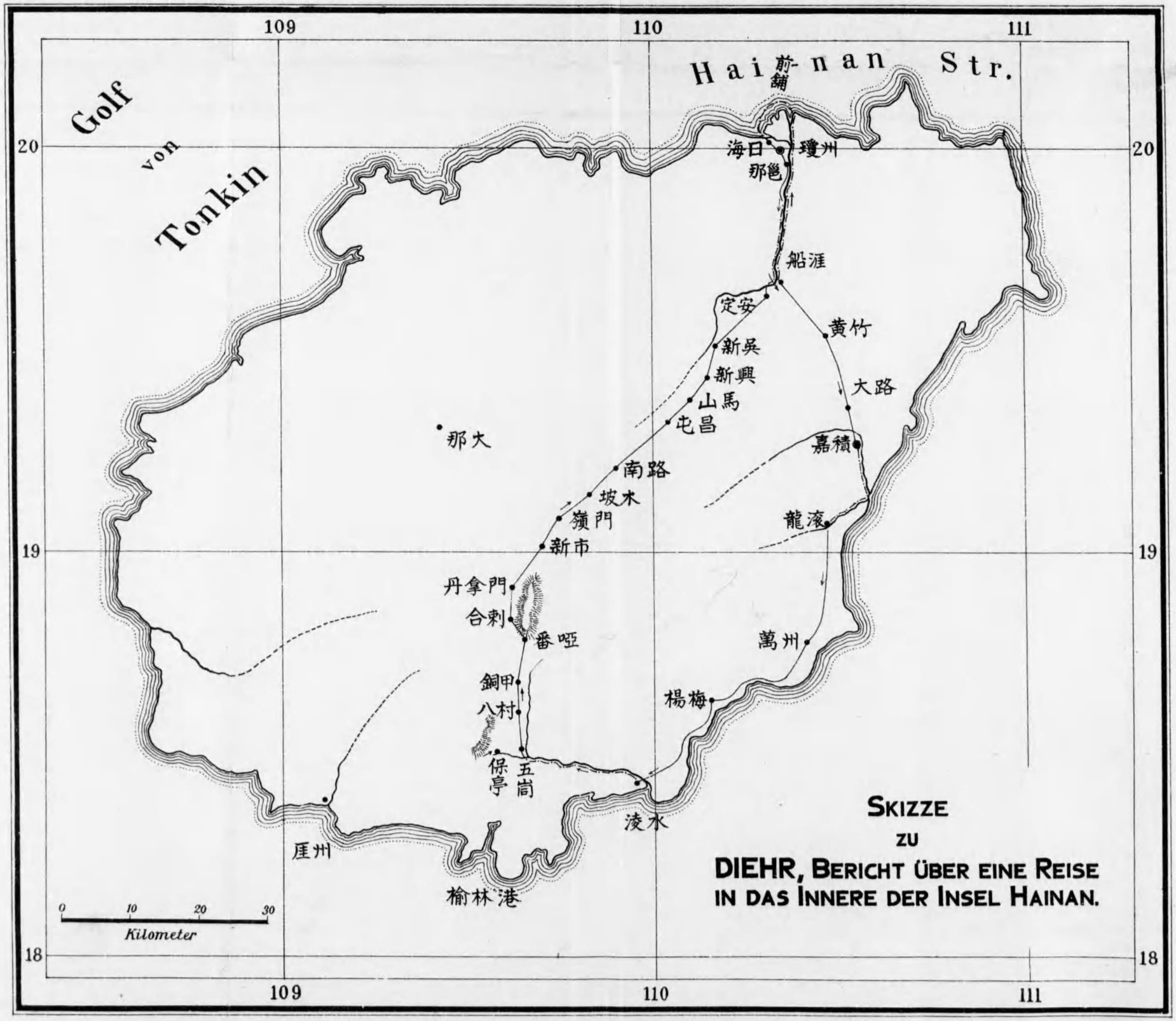
14.25-41

海南島奥地旅行報告

目次

一、はしがき……一頁
二、海口—陵水……三
三、陵水—黎地—嶺門……八
四、嶺門—海口……二〇
五、結尾……二一


19
19
EINE REISE
L HAINAN.
0
10
20
Kilometer
18
18
111



SKIZZE
ZU
DIEHR, BERICHT ÜBER EINE REISE
IN DAS INNERE DER INSEL HAINAN.

海南島奥地旅行報告

ヱム・ディール（M. Diehr）報告

Mitt. d. Sem. f. Orient. Sprachen, 1908, 1Abt. 所載

はしがき

海南島の支那歴史に言及されてゐるのは可なり古いことである。一般に眞珠の産に富む島として知られ、河川に埋藏する砂金、殊に山地に繁茂する香木は普く世に知らるゝところである。然し交通甚だ不便にして、而も野蠻な住民が居り、剩へ海岸には海賊の巢窟があるといふ風で、宮廷から使者の至るにも月餘の日子を要し、それもたゞ島の貢税を取立つる要務に限らるゝ有樣で、島の荒凉、野蠻な住民の爲め到底長く滯在出來る處ではないとされてゐる。斯くの如き島狀は古來有力な反政府分子の恰好な流謫地として利用され、島の歴史が蘇東坡、胡澹菴の如き人物と密接な關係を有する結果となつたのである。

(一) 宋の哲宗皇帝の時舊淸黨の故を以て瓊州に貶せらる。其の遺蹟瓊州府の東十餘町の地にあり。（—譯者）

(二) 胡澹菴は胡銓の別號にて、南宋の高宗皇帝が宰相秦檜を信任して金と和せんとするに極力反對したる學者にして、秦檜の爲め詔州（廣東省）に貶せられし事實あるも、海南島との關係は不詳なり。（—譯者）

斯く古い歴史を有するに拘らず海南島は今日なほ殆んどその發展の跡が見られない。僅かに一部海岸地帶及び北部平野が稍々開拓されてゐるが、内地の山岳地帶は全く野蠻な黎族に放任されてゐる。古來、此等の黎族は時折平

地へ下りて來ては、殺戮、掠奪等の蠻行を常ごしたのであるが、近年次第に此等の蠻害も稀になり、現今蠻境に於ては兩者の間に親しく交易が行はれてゐる實狀である。なほ此等黎族中には既にその風俗、習慣に可なり支那人の影響を受けた者があるが、然し黎地に於ける實際の接觸は未だ行はれず、現在、黎地は殆んど支那人に閉鎖されてゐるのであるが、近き將來に於て、支那の文化が黎族を征服、感化するであらうといふことは疑ひなき處である。然し山に對する恐怖、黎人の粗暴な性格、蠻地の殺人的な風土等に對する迷信的恐怖が今もなほ強く支那人の氣持を虜にして居り、素晴らしい嶮路、有毒の水、瘴癘の氣滿つる谷間、高地に漂ふ殺人的雲霧等々が一般に信ぜられてゐる。殊に鬱蒼たる密林に蔽はれた五指山の峻峰は平地の支那人から畏怖の念を以つて仰がれ、此の山には黎人も行かず、全く大蛇と野獸の棲家となり、その山道は巖の間を分け、大きな口を開いた龜裂を渡る恐しい嶮路であつて、一度び此處に足を踏み入るれば、再び歸る者なしとされてゐるのである。黎地に對する支那人の恐怖は大凡そ斯くの如きもので、外人の此等奥地に探査の歩を進むる者勿論なく、支那人の住む海岸地域の探査さえ不完全極まる現狀である。

一九〇四年十二月、此の地の稅關勤務を命ぜられ、海口に赴任して以來、此の島の調査はいたく余の興味を牽き、遂に本年初頭四週間の休暇を利用して、奥地旅行決行の計畫をたつるに至つたのである。然し此の地の地方廳は、蠻界を越えんとする旅人に保護援助を與ふるが如き用意なき事は余の知悉せるところであつたので、進んで行かうとする者に對しては、之を阻止するに非ずやとの危懼を抱き、わざ〳〵黎地を迂回して南方へ至り、地方廳の監督の及ばざる地點より蕃地へ入ることゝした。卽ち海口より舗前江に沿ふて先づ南方へ行き、それより南東へ轉じて黃竹、大路、嘉積市を經て東海岸へ出づる。それより更に海岸に沿ふて陵水へ至り、陵水河の適當な地點から北方の蕃地へ乘り込み、歸路は嶺門へ出づる豫定であつた。嶺門より海口へ至る距離は二百八十支里で、一般に三日間

の行程とされてゐる。

幸ひにして萬事順調に進んで、以上のプランを遺憾なく遂行することが出來た。二十二日間に一千二百支里の行程を踏破し、その風土、利用價値、及びその發展可能性等に關する大體の印象を獲得し得たのみならず、歐人未踏の蕃地を通りつゝ、途中黎人の珍らしい種々の風俗、慣習に接し得たのである。旅行の成果は勿論不充分なものであるが、許された時間と通過した地域内に於いては最善を盡した積りであつて、粗漏の點は寛恕を願ふほかない。

海口——陵水

種々の準備に暇取つて、一九〇六年二月十三日、漸く出發の運びとなつた。第一日の行程は舗前江岸の那邕村へ至る四十支里であつた。途中、可なり興味ある風物に接しつゝ夕方漸く宿舍に着いたのであるが、此の宿舍なるものが實に慘めで、早くも海口の住居が戀しいものに思はれた。これは勿論那邕ばかりではなく、此の旅行中は折りに觸れ海口の町が小巴里とも言ふべき懷しい色彩に包まれて思ひ出されたのであつた。

二月十四日の早朝、那邕を發ち、河岸に沿ふた街道を南方へ向つた。約半日の間、荒れるに任せられた單調極まる數哩の道路を進んで行つたが、行程遲々として捗らず、かくては此の日の目的地たる船崖へ着くのは何時のことやら不安に思はれたので、遂に船を雇つて舗前江を溯航することゝした。かくて漸く目的地に辿り着いたのは翌朝の明け方のことであつた。

海口と船崖の間は一望の平野をなし、可なり開墾されて居たが、その耕作物は殆んど米と甘蔗に限られてゐた。その間、各所に部落が散在し、此等部落の周圍には開墾可能な森や叢林が到る處に散見してゐた。鮮やかな此等樹木の色彩と古々椰子のこんもりと伸び上つた姿とは單調な風物に倦いた眼を樂しませる唯一のものであつた。耕地

は總て鋪前江に依つて灌漑されるのであるが、支那人はその灌漑の爲に周邊に竹筒を取りつけた大きな水車を用ひてゐる。此の水車を河中に浸し、それを廻轉せしめて河水を汲み上げ、更にその水を特別な竹の導管を通じて耕地へ送り込むのである。水車の廻轉には流水の力を利用してゐる。河面から耕地までの高さは往々十呎から十五呎に達する處があるので、車輪の大きさも相當なものであるが、然しその形容は可なり雅致に富んだものである。車輪の材料にも殆んど竹が用ひられてゐる。

鋪前江は海南海峽に注ぎ、一般に信ぜられてゐる如く、その源を五指山に發してゐる。廣い河原を有し、雨期には之に滿々たる水量を湛ゆるのである。此の時も可なりの水量を有してゐたが、水深は概して僅かなものであつた。河床は概ね流砂なり成つてゐた。河上の交通は總て小船に依り、最も大きなもので、廣東—梧州間の米穀運搬に用ゆる所謂「西江船」"West-River-Boats" 程度のものである。江上の船行は可なり賑やかであつて、此等の船の大部分は縣城所在の定安を終點とするのであるが、それより更に溯航を續けるもゝあるのは勿論である。而して海口—定安間には殆んど毎日定期連絡が行はれてゐる。

船崖まで鋪前江岸に沿ふて來た街道は此處から東海岸へ分岐し、二日の行程にて嘉積に至つてゐる。此の街道の沿線は主として所々に石原を有する荒蕪地であるが、時には未開墾の豐沃な原野が數時間の行程に亘つて續いてゐることがあつた。此等の沃地が殆んど未開墾の儘に殘されてゐるのは、全く住民の稀薄なるに由るのであつて、耕地は殆んど部落の緣邊に限らるる有樣である。黄竹、大路は共に微々たる小邑で、その存在意義は疲れた旅人に一夜の宿を借し得るといふに過ぎない。

嘉積に着いたのは二月十七日の朝であつた。町は餘り大きなものではなかつたが、街上の交通は頻繁で、仲々活氣に充ちてゐた。町は可なり大きな河に臨んで居たが、此の河は水深甚だ淺く、數時間の航程で海に達してゐた。

此處にはアメリカの長老教會があり、四人の傳道師と、一人の醫師が之に所屬して活動してゐた。一つの會堂を有し、別に學校と病院を經營してゐた。我々の行つた當時は丁度病院の擴張工事最中であつた。教會の事業、特にその醫療方面に關する限りに於ては一般の非常な感謝をかち得てゐた。

嘉積を經由して南方へ旅行する者は通例一日を此の町で過し、その夜船に乘つて七十支里を距つる龍滚へ向ふのである。船は河を下つて一度海岸へ出で、直ちにその南方に接して南西から流れて來る川に這入り、それを溯航して龍滚の町に翌朝早く到着し、之に依つてまる一日の旅程を節約することが出來るのである。之に用ゆる船は普通の川船に過ぎない。

龍滚以南の道は略々海岸線に沿ふて走つてゐる。此の邊には良く椰子が繁茂してゐるので、風致は全く熱帶的である。家屋の樣式は丹念に積み上げられた煉瓦建の一寸珍らしいもので、一般に手堅い裕福な外見を見せてゐる。住民もこれまでのものに比して非常に感じが良く、男女共に柄が大きくして、美しいと思へる容貌にも屢々出會つた。

縣城所在の萬州に至る一寸手前から街道は砂利の鋪裝路となつてゐたが、その尖つた砂利を踏んで行かねばならぬ旅行者には却つて迷惑で、此の鋪裝路の計畫者に感謝を捧ぐる者は恐らく工事の請負業者だけであらうと危まれた。町の宿舍に於いて旅人を迎へる安息は如何なる場合にも絶對の必要であり、疲れた旅人の宿舍に於ける欲求といふものも極く愼しいものに過ぎないのであるが、此處の宿舍は全く餘りにも慘めであつた。なほ此處の町そのものに就いては殆んど言ふべきものはなく、その大きさも價値も大したものではなかつた。

萬州から二日の行程で陵水へ至る。途中、可なりに伸びた陸稻の廣い耕地を見た。萬州までの風光は殆んど單調、荒涼たるものであつたが、萬州より南へ行くに從つて次第に風光の美が加はつた。然し劣惡な道路に氣を取られ、

之を觀賞するが如き餘祐は殆んど無いと言つて良かつた。嘉積を出ると、既に黎地の山岳が南方の地平線に姿を現はしたが、南方へ進むに從つてその形狀は益々明確に浮き出し、萬州の手前では遂にその支脈を横切らねばならなかつた。萬州を過ぐれば、直ちに山岳が海岸に迫り、數時間の間、道は海濱に沿ふて進んでゐたが、軈て遠く海中に突き出た半島の脊を越えて行つた。此の邊から街道は殆んど山道となり、茂つた草や藪林の間を曲り繞つて、時にはトンネルのやうな茂みを潜つて行くかと思ふと、突兀たる岩道を攀ぢ、或は溪流の川床を傳つて行かねばならなかつた。海岸に寄する激浪は時折山道を行く旅人の耳に遠雷のやうな鈍い音を傳へて來た。山道の盡くる處、また直ちに海濱となり、此の日の午後はずつとかゝる山と海との變化に富んだ獨特な風光の中を行つた。即ち一方は南の季節風に搔き立てられて浪立ち騷ぐ海洋、その遙かの水平線には峨々たる岩島が浮かび、他方には鬱蒼たる樹林に蔽はれた山岳が聳え立ち、急峻な傾斜を以つて海中にその山脚を沒してゐた。

二月十九日夜遲くなつて楊梅についた。此處は海岸から稍々引込んだ處にあり、部落は數戸の貧弱な粘土壁の小屋建てから成つてゐたが、主として往來する旅人の接客に依つて生計を立てゝゐた。各戸の前には何れも大きな數箇の竈が設備されてあり、旅客の來往が可なりのものであることを示してゐた。

楊梅の宿も御多分に洩れず粗末で、宿舍を後にした時は、吻とした氣持であつた。道はそれよりだら〳〵下りに海濱へ出で、それより約半日の間海岸の粗い砂道を行くと、次に再び道は海岸を離れて内地へ入り、荒凉たる原野を通つて、遂に縣城所在の陵水に達する。此の間到る處に夥しい椰子が繁茂してゐて、僅かに風光の單調を破つてゐた。此の邊は特に椰子が多く、眼路の及ぶ限り殆んど椰子である。然し此等の椰子の繁茂の狀は全く不整頓極まるもので、何等人力の加へられた痕もなく、商品生產の組織的栽培などでは勿論なかつた。然しその繁茂の狀から見て、氣候、土質共に非常に好適で、栽培の法宜しきを得れば、立派な商品としての生產が得らるゝに拘らず、此

の放慢の狀は實に惜みても餘りあるものに思はれた。

陵水は可なりの廣さを有する非常に繁華な町である。町は河に臨んでゐるが、此の河は途中一支流を加へ、百五十支里にして海に注ぎ、内地との間に舟航の便を與へてゐる。町に着いて見ると、丁度旅館は二つとも滿員であつた爲め、市當局の世話に依り城門の上にある樓屋に五彩の偶像と室を共にすること、なつた。與へられた室は町の如何なる旅館よりも清潔で氣持良かつたが、場所が公共的な建物である爲め訪客を拒む手段がなかつた。早朝から夜中まで我々は絶え間なく好奇の的となり、我々の所持品から風彩まで、何一つとして彼等の興味の對象たらざるはない有樣であつた。旅の異邦人及びその所持品を見たがる彼等の好奇心を頭から否定し去るほど余は野暮な氣持を有するのではないが、一般大衆に比して可なり裕福らしい一人の男が余の長靴を穿いて見たり、呆れてゐる一同の面前で余のヘルメット帽を冠つて見せたりした時は、不快の感情の先立つのをどうすることも出來なかつた。ヨーロッパ人が高い教養と習慣を有するが故に、かゝる僻遠の地に於て見世物のやうな取扱ひを受けねばならぬことは、先づ止むを得ずとするも、地方廳當局としてはもつと適切な庇護の手段を講ずるのが當然であらねばならぬ。訪問を受けるといふことは、若しそれが一般に禮儀とされてゐる通り十分乃至半時間位のものであれば、何處の世界でも嬉しいことに相違ないのであるが、然しそれが朝の五時から夜中までひつきりなしに續いたとしたら、殊に明日の旅程の爲め一入の安息を必要とする者にとつては嬉しいどころの騷ぎではなかつた。かゝる場合、當局としては何等かの手段を講じて、此等の訪客を制限するのが當然であつて、さうすれば一般に支那を旅行する外國人の印象を良くするや必せりであらう。

一日半の滯在の後、陵水の町を後にした時は全く重荷を下ろしたやうな感じであつた。陵水からいよ〳〵奥地へ這入るのであるが、我々は川船を利用して之を溯航することゝした。陵水河は源を五指山に發し、切め南方へ流れ、

後東方へ迂回、百二十支里にして陵水の町に達し、更に十五支里にして大きな陵水灣に注ぐのである。此の陵水河を傳つて内地へ行く者は、先づ北方への屈曲部まで至り、其處から西方へ支流を傳つて十支里を行けば、黎部落の石峒へ行き、更に三十支里にして保定へ至る。保定の住民も主として黎人であるが、此處には支那の分遣隊が駐屯してゐる。陵水から保定へ至る間は既に殆んど黎人の獨り天下であつて、保定に於ける支那の統治も強壓的なところは既になく、寧ろ阿諛的な方策を取つてゐるやうに思はれた。我々は石峒まで舟航し、それより北方へ黎地へ入り、五指山を經て、再び支那人部落の嶺門へ出づるプランを此處で確立した。

陵水滯在中出來るだけの努力を盡して黎地の狀況、旅行及び休養の方法等に關する確かな情報を集めようとしたのであるが、結局徒勞に終つたので、兎に角、旅行に餘り必要でないと思はれるものを總て此處から送還することにし、食料、及び宿舍はその時々の黎地で得られるものに賴ることゝした。卽ち我々は如何なる場合にも北方の支那人部落へ出る一途あるのみであつたので、荷物に煩はされることが少いほど、萬一の場合に應ずるにも何かと好都合と考へたのである。はじめ海口から五人の苦力と一人のボーイ、一人のコックを伴つて來たのであるがボーイとコックは海口出發以來殆んど用ゆる機會もなかつたので、陵水からその儘海口へ歸還せしむることゝし、同時に準備して來た食料、その他の携帶品の大部分も送還することゝした。

陵水——黎地——嶺門

かくて陵水を發つたのが二月二十三日午後であつた。我々の雇つた船は普通のボートの大きさにも充たぬ粗末な川船であつた。船の中央部には編竹の屋根で蔽つた客席が設けられてゐたが、その廣さも高さも漸く正座して坐れる位のもので、その中に這入るには四つ這ひにならねばならなかつた。船の前部には荷物を積み、艫の方には二人

の船夫が座席を設けてゐた。上げ潮の時には帆を用ひるのであるが、我々の出發した時は丁度引き潮であつたので押し上げて行くほかなかつた。此處では殆んど竹竿は用ひられず、淺瀨や急流にかゝつた場合には船夫が船を下りて押し上げて行つた。苦力達は船の後を追つて陸行し、或時は河岸の小路を、或時は川原を進んで來たが、必要に應じて船夫に手傳つて船の後押しまでやらされた。水深は僅かに數糎に過ぎない處さえあり、最も深い處でも半米を出づる處は殆んどなかつた。然るに一度雨が降れば、水量は急激に增大し、二米乃至三米の水深を有するに至り、平常穩やかな此の水路も危險な急流と一變し、平常陵水—石峒間二日を要する航程が四日、或はそれ以上を要すると言ふ。

陵水の町を出はづれると、河岸は椰子の密林に蔽はれてゐたが、約二十支里の上流に至れば、此の椰子林は完全に姿を消し、その代りとして西岸は叢林及び草藪と化し、その間に高い樹木があちこちに散在してゐるに過ぎなつた。此の荒涼たる光景は山岳地帶に至るまでずつと連續してゐた。然し山地へ至ると、谷底から山頂まで密林に蔽はれ、風景も仲々美しく、所々に絶景と思はれるやうな處があつて眼を牽いた。山地へ這入る一寸手前の河の北岸に温泉の湧出を見た。温泉は盛んに沸騰して居り、附近の川原に膝を沒するやうな火山灰から成る粘土があつたが、そのほかには附近に何等外觀上火山らしい形跡は見受けられなかつた。

二月二十四日の朝、海口出發後十二日目に石峒に到着した。我々が部落の見ゆる處に近つくと、船着場は一杯の人だかりであつた。大勢の人の群に取り圍まれて一軒の家屋へ導かれたが、其處は部落唯一の商店兼集會所とも言ふべき處であつた。戸口の處には附近黎部落の頭目が出迎へて挨拶した。その挨拶ぶりは實に鄭重極まるもので、一寸形容に苦しむ位に慇懃で諒々しいものであつた。かゝる時代錯誤的な悠長極まる謙讓の德の尊重されてゐるのも、文明に置き去りを食つた僻遠の地なればこそであつて、我々も仕方なく闊の處に立ち停り、同じ慇懃さを以つてそ

の儀禮を眞似て繰り返へした。かくして我々は一人〳〵入口の閾をまたぎ、頭目が低頭しながら指し示す設けの席へ招ぜられて行つた。此の鄭重な儀禮は單に文明の地方から此處へ這入つて來た儘を形式的に借用したといふのではなく、眞に我々に對する尊敬の念として受取れたので、余も亦大いに之を感謝しつゝ設けの席についたのであつた。然し同行の苦力等は殆んど此等のことには頓着せず、早速食事の用意にとりかゝつた。その間に余は黎人と交誼の道を開かうと思つて種々努力して見た。先つ彼等の鷄や卵に對し、彼等の最も貴重品としてゐる我々の火藥を讓渡する提議をしたことから、交易の道が案外好都合に運んで行つた。猶我々が喜んで醫療の相談に應じ、治療をしたり、投藥することを見て取つて、近隣の黎人が續々と押しかけて來たので、我々の休息所は宛ら施療院のやうな狀景に一變して了つた。

我々の到着の噂は導火線を傳はるやうに諸方に擴つて行つたと見え、我々を見むものと、近隣から陸續として押し寄せて來た。我々の風彩及び所持品もそれ〴〵彼等の興味を牽いたのは勿論であるが、殊に彼等の注目の的となつたのは、我々の食事の樣式であつた。我々の一擧手一投足から瞬時も眼を離さず、一々盛んに評釋が加へられ、若し何か腑に落ちないことでもあれば、見物人中の悧巧な者がその洞察力に依つて理解の惡い連中の蒙を啓いてやるといふ風であつた。さうすると「一同の眼には直ちに理解の光が閃き渡り、我々の奇習?に對する理解の鍵として の一種の呪文とも言ふべき "Kantah" (食つてゐるのだ!) といふ言葉が口から口へ繰り返へされるのであつた。—食ふといふ事を全く第一義的なものに考へてゐるのは、必ずしも此の海南島の黎人のみではないが、然し食事といふものをこれほどの興味を以つて詳細に研究し、食事の經過を殆んど生理的と言つても良いほど眞劍に批評する處は曾て見たことは勿論、聞いたこともない。彼等黎人にとつては、食事は實に人生の最大重要事の一つで、絶大の價値と意義をそれに托してゐるものであるらしい。

石峒は小さな部落であつて、住民の大部分は黎人であるが、二三の支那人小商人が混つてゐる。部落の家屋、といふよりは寧ろ小屋と言つた方が適當であるが、は見たところ一寸這入ることを躊躇させられるやうな粗末なものである。壁は竹で編み、その内外から土を塗りこめて居り、屋根は總て藁を以つて葺いてある。然し部落は鬱蒼たる山岳に取り圍まれ、附近には所々に景勝の地を有し、晴れた日には此處から七指山を仰ぐことが出來るのである。七指山は三十五支里を距て、その西方にあり、七つの山頂から成るといふ一連山である。然し此等七個の山頂を辛じて全部見晴らし得るといふのは保定だけに限られ、石峒の如きは僅かにその一箇を見得るに過ぎない。實際此の連山の名稱には一寸頷き難いところがあり、此の連山の最初の命名者は七星の座に當るところから七星山と言つた、といふ見解に余は寧ろ從ひたい。卽ちその後發音の轉訛から、海南の誇りである五指山に對照せしめて、七指山と呼ぶに至つたと考へられる。事實、海南語「指」と「星」の發音には殆んど相違が認め難いのである。

石峒で會つた黎人のタイプはその後嶺門へ出づるまで殆んど變るところがなかつた。黎人の服裝、—服裝などと言ふのは寧ろ業々しい限りであつて、彼等の身につけてゐるものと言つては、褌と一種のジャケツに過ぎないので認ある。最近になつて漸く支那人の服裝が黎人のうちに用ひられるやうになり、保定以來その文明の影響が著しくめられた。此等の影響の楔をなしてゐるのは勿論支那商人であつて、彼等黎人がその頽廢的な影響のみを主として受けてゐることは、かゝる場合何處にでも見らるゝ例であつて、別に異とするにも足りないところである。

此の地方の黎人は殆んど總て支那人の髮容を眞似、頭を剃り、辮髮にしてゐた。然し場所に依つて多少此の髮容に相違が見られるのであつて、崖州附近の土人は蹠頂に髮を捲き上げ、それを額にさしかけてゐるので、甚だ奇拔な恰好をなしてゐる。その他頭は剃らずして髮だけを捲き上げ、タルバンのやうな頭纏布で以つてそれを縛りつけてゐるものもあつた。

容貌から推して黎人が支那民族に屬せざることは明らかである。男の中にはいくらか支那人らしい容貌を有する者も見受けられたが、女の方は特に支那人との相違が際立つて居り、而も此處の女が概して美しいといふことは見逃せない印象であつた。女の服裝も男同樣極く簡單なもので、膝に達しない模樣入りの上衣をつけてゐるだけであるが、而もその裾は歩行の邪魔になるほど狹くて窮屈なものである。膝から下は露き出しで、勿論裸足である。なほ上にジャケツを着けた者もあるが、その袖は小さく、殆んど腕に密着するやうに作られてあり、前と後には種々の色絲を用ひて刺繍を施してゐる。勿論、その樣式は各部落、或は各氏族に依つて區々樣々である。首には普通硝子玉の首飾りをつけてゐるが、欲張つたのになると、二十個もぶらさげてゐる者がある。贅澤な者はその上に銀の薄板で作つた幅二―三糎の首輪を嵌め、更に特殊な形をした銀製の耳輪を吊げてゐた。此等の銀の裝飾品と華美な着物の色彩とが照應し、更に明るい光線の中にゐる黎人の肌色と調和して、一種の魅力を發してゐた。なほ女の顔に入墨する此處の習慣は若い黎人の娘の容貌を少しも損はず、却つて引立てゝゐるやうであつたが、然し中年以上の女の文身は餘り憾じのよいものではなかつた。文身の線狀、模樣等は部落、及び地方別で夫々違つてゐた。男には文身の習慣はない。

出發以來十三日の早朝、部落の人々に別れを告げ、いよ〳〵密林に蔽はれた山地への行進を始めた。部落を出で、北方へ進むこと少時にして陵水の上流に出た。陵水の水は山岳地帶の大きな岩や無數の礫の中を分けて南方へ流れ下つてゐた。道は此の河に沿ふて溯り、或時は谷底を傳ひ、或時は激流を見下ろす斷崖を傳つて進むのであつたが、此等の上り下りの坂路は嶮峻を極め、足を踏み外さぬ爲め瞬時も注意を怠ることは出來なかつた。岩や樹の根の間を僅かに小さな一本の道が通じてゐるだけで、或時は大樹の林を行き、或時は竹籔の中を通り、時にはトンネルのやうになつた灌木の籔の中を潜り抜けねばならなかつた。沿線の樹木は總て非常な勢で繁茂して居り、左右から路上に枝を擴げて蔽ひかぶさつてゐたが、それ等の周圍には人丈もあるやうな蘆荻、雜草と共に纏繞植物が生ひ縋り、殆んど道路をうち塞いで、いやが上にも歩行の危險と困難を甚しくしてゐた。然し我々が此の旅行を乾燥期に選んだのは、せめてもの幸ひで、旅行者の經驗や、住民等の談に依れば、此等のジャングルの中には雨期になると樹上といはず、籔といはず、岩や道路の嫌ひなくあらゆる處に無數の山蛭がゐて、通行の者に飛びつき、脚、腕、顔の別なく嚙みつくので、殆んど防禦の法がなく、旅行者や土人の呪詛の的となつてゐるといふことであつた。

旅行中最も困難であつたのは川渡りであつた。何處の山岳地帶もさうであるが、此處にも夥しい山川が奔流してゐて、而も此處の高地帶は一年のうち數箇月間を雲霧に閉ぢこめられ、降り續く雨の爲め總ての山川には水が溢れて激流をなして居り、さらでだに困難な道を一層難しいものにしてゐるのであつた。即ち此處を行く者は間斷なく此等大小深淺樣々の山川を無理にも渉つて行がねばならないのであつて、或日の如き、我々は大小十五に及ぶ川を渉らねばならなかつた。淺いもので四分の一米、深いものは胸に達するものがあつた。我々は兎に角此等の川をこれと言ふ大過なく無事に渉つて行つたのであるが、今日なほ此の邊の行程を回想するのは、餘り愉快な氣持ではない。それと言ふのも元來人間は水棲動物からは緣遠いもので、これ位激流の渡渉を繰返へすとなると、遂には全くうんざりして了ふものである。然し危險なのは雨期の場合だけのことで、普通の時には渡渉には別に危險といふべきものはないのであるが、餘り度々の水浴は體の疲勞を增すばかりで、苦力等さえ後には餘り之を喜ばなくなつて了つた。

かうした地域を旅行するには革靴、或は革の長靴の不適當なのは勿論である。土人は總て裸足で歩いてゐるが、一番適當なのは裸足に草鞋穿きであらう。裸足が一番良いのは勿論であるが、これは誰れにでも出來る技ではないので、裸足に一番近い草鞋穿きを最善とする所以である。此の草鞋は歩行を緩衝する役目をなすと共に、滑かな坂

道や、河原の丸石の上でも仲々辷らず、斷崖ではうまく足場を支えるなど實に調法なものである。

途中、陵水と萬州の境界を越えて、夜の宿舍に豫定された八村部落に着いたのは既に夜であつた。此處で行はれてゐる迷信に、瑞祥の氣は奥地の高い山頂から出づると言はれてゐるが、我々は島内十三縣のうち九つの縣境を踏破して、島の中央までその祝福の氣を求めて來たわけである。縣境は一應嚴密に區分されてゐるのではあるが、何れも餘り分明なものではない。卽ち別に境界の標石、或は標識柱の如きものもなく、峠の町はおろか、貧しい峠の部落といふが如きも勿論なく、只深山の靜寂が稀に野猿、鹿、熊、猪その他種々の鳥類の聲等に依つて破られてゐるといふに過ぎなかつた。

八村は溪谷の懷ろにある繪のやうな小さな部落で、總ての黎部落の例に洩れず谷川の岸に立つてゐた。部落の背後には五指山とその高さを競ふ七弓山が聳立してゐた。部落に這入つた我々は部落唯一の支那人家屋に招待され、心からの歡待を受けた。黎部落には大抵かうした一二の支那人が定住してゐて、ロシア部落に於けるユダヤ人のやうな役割を勤めてゐるのである。兩者の相違は支那人が夫婦關係等を結んで、黎族中にすつかり同化して了ひ、その商賣の方法等もユダヤ人ほど惡辣でないといふだけである。かうした姻戚關係の爲め此等の支那人は些かも侵入者として視らるゝが如きことなく、黎人一般に比して稍々優れた教養と怜悧及び狡猾さを有する爲め衆人の畏敬をかち得る位置にあるので、正式にではないが、殆んど部落の長たる實情にある。問題の突發する場合などには必ずその意見が徵せられ、而もその意見は最も重きをなすのが常である。かゝる支那人はまた部落に於ける一般取引代理の役を行ひ、總て賣買に關する仲介、及びその建値を司つてゐるので、一般に非常に富裕である。每年の收穫物は此の支那人の手に依つて海岸地方へ運搬、賣却され、衣類、嗜好品その他土人の必需品を仕入れて歸るのである。なほ黎人は殆んど例外なく狩獵に從事するので、銃器、彈藥の賣買を司る此等支那人の存在は黎人にとつて正に絶對的必要であつて、それだけまた彼等の尊敬をかち得る所以でもある。

翌日の行程もはじめは殆んど前日同樣の地形であつたが、正午頃から高い萱の生ひ茂つた平原となり、その夜の宿舍に豫定してあつた銅甲の部落までずつと連續してゐた。部落の周圍には高い竹垣が繞らしてあつたが、道路の突き當りの處だけ稍々低くなり、越ゆるに便利なやうに垣の内外に二段になつた竹製の梯子が設けられてあつた。これが部落の門戸をなすもので、其處に二本の側柱と一本の横棒があり、それに綠の枝で裝飾を施し、一種のアーチが作られてゐた。此の設備は家畜の逃走を防ぐと共に、一方森の野獸に對する防禦の役をなすのである。部落を訪れる者は總て此處で許可を受けて這入ることゝなつてゐる。

銅甲の部落でも大勢の病人が治療を求めて押しかけ、日の暮れるまで殆んどその診察と治療に忙殺されて了つた。幸ひ藥品の準備が豐富であつたので、多數の患者を充分滿足さすことが出來た。

銅甲では翌日の行程に就いて出來るだけの取調べを行つて見た。その結果、先づ五指山の麓にある番啞の部落へ道を取ることにした。然し黎人は元來時間と距離に關する觀念が頗る曖昧であつて、銅甲―番啞間を百二十支里だと言ふくせに、優に一日で行けると主張するのであつた。こんな山岳地帶の百二十支里を一日で行くといふのは、何と言つても不合理に違ひなかつた。

兎に角、實行のほか別に手段もないので、翌朝出來るだけ早く出發した、途中の風光は全く粗野な美しさを有し、樹木の繁茂狀態も更に著しくなつた。午前中の行進は好天に惠まれたが、正午頃から霧が出て、間もなく我々の視野をすつかり蔽ひ隱して了つた。霧は次第に濃くなり、番啞に着いた頃には五指山の方向さえ全く解らない有樣であつた。本來、五指山を見ることが、旅行の主目的の一つであつたので、翌一日を番啞に滯在して、霧の霽れるのを待つことにした。黎地の霧は一種の名物であつて、八村の宿の主人の如きは、七十日間も霧に閉ざされた經驗が

あるこ言つてゐた。從つて河水の汎濫こ密林の生育はその必然の產物であつて、それに伴ふ夥しい濕氣は健康に非常に有害で、部落の半數が熱病に侵されてゐるこいふのも珍らしいことではなかつた。かうした風土が土人の健康に有害なるのみならず、旅行する他國人や支那人にこつても同じく危險なことは勿論で、出來るだけの注意を重ねても、苦力が病氣で倒れ、死に至るこいふことも決して珍らしいことではないのである。

翌朝の夜明け後間もなくして霧が幾分の晴れ間を見せ、五指山最南端の頂きをはつきりこ見ることが出來た。五指山の山列は南から北へ走つてゐるので、此處からはその南端の一頂が見えるだけであつた。山の高い處は森も疎らで、此處からの登山はさして困難ではないやうに思はれた。然し黎人は決して此の山に踏み入ることをせず、いくら金を出しても、またいくら言葉を盡して見ても、案内を得ることは困難である。—山の傾斜面にはぐら〳〵した不安定な岩石がごろ〳〵して居り、その上到る處に大きな口を開いた裂目があつて、登る者は決して生きては歸らぬ、こ彼等は信じてゐるのである。曾て山に憧れた二人の僧が崩門口から山へ登つて行つたが、それきり再び歸つて來ぬこ語り傳へ、彼等の畏怖の生きた例證こなつてゐた。

番啞は廣い谷間にあつたが、此の谷は良く開墾されて、總て耕地をなしてゐた。此等の耕地の收穫は部落の需要に照らして可なりの餘剩を有するやうに思はれたが、その結果であらう、此處の部落民の生活は可なり富裕らしく、彼等の衣服、殊に女の衣服にそれが明らかに看取され、他の部落に比して遙かに行き屆いた立派なものを着けてゐた。黎人はまた一般に牧畜も營んでゐるが、然しこれは餘り大したものではなく、牛、水牛、豚がその主なるものであつた。稀に馬を見ることがあつたが、その利用は土地柄非常に限られたものであつて、此の山岳地帶の黎地を馬で乘り廻すこいふことは、殆んご不可能に近いのである。

番啞こ銅甲で我々の宿つた家は、八村こ五峒で借りた宿に比して非常な相違が見られた。此等黎人の家屋に宿を

借りたのは、ほんの僅かの時間に過ぎず、本質的なことは解らなかつたが、彼等が住居の安易こいふことに對して一種奇妙な觀念を有することを見逃すことは出來なかつた。

此處の家屋は總て高さ一呎半乃至二呎の床下を有し、壁は竹の編細工、屋根は藁葺であつた。以上は大して珍しいことではなかつたが、我々を驚かしたのは、その床であつた。指の大きさ程の竹をターレル貨幣大の四角形の穴を有するやうに直角に組合はせて作つた一種の格子樣式で、一見弱さうな恰好であつたが、全體としては可なりがつちりしたものであつた。此の樣式の利益こ思はれる點は、我々には餘り明らかでなかつたが、不利な點だけは非常に著しく目に付いた。例へば、此の床の上に椅子、或は腰掛けを置かうこしても、絶對に不可能であつた。その他、靴を穿いても此等の丸竹の上を歩くのは、豫想以上に危際極はまるものがあり、それかこ言つて、裸足でその上を歩くのは一層苦痛であつた。食事時になるこ、その香りに誘はれて、附近の犬や豚が床下に這ひ寄つて來た。床の上に噛んで簡單な食事をこつてゐるこ、突然足の裏に激しい刺痒を感ずる。有毒な百足や、大蜘蛛がゐる筈は無いと思ひながらも、それを攫んで見るこ、突如悲鳴が聞えるので、全く吃驚させられるのである。これは格子の隙間から突き出た半野生の尨犬の耳である。夜になると、床の上に毛布を擴げて寢るほかないのであるが、丸竹の上の寢心地は甚だ拙いものである上に、漸く寢ついて、眞夜中頃になると、床下の豚がその鼻を格子の穴から突き出して嗅き廻り、耳の傍でブー〳〵唸り廻るのである。また吹きつける風を防ぐ術がないので、風の夜などは風邪に冒される虞がある。つまり壁に吹きつける風が總て床下に潜り、不愉快な通風こなつて掠めて行くのである。かうした家での一夜の宿りは慣れない者にこつては實に辛いこいふほかなく、我々は只一途に夜明けを希ふばかりであつた。

番啞の夜の明け離れた時は全く救はれた氣持であつたが、生憎天候が再び急變して雨模樣こなつて來た。雨にな

つては、行程が困難となる上に、病氣になる虞れがあつたが、かうした宿に滯在する氣には到底なれなかつた。出發すると間もなく實際に雨が降り出した。早く此の山岳地帶を拔け出る爲め、一同を勵まして、足を速めたが、次第に山道は雨水に洗はれ、川の渡渉も危險を增す一方であつた。

番嘔を出たのは三月一日で、豫定通りに行程が捗れば、三日のうちに支那人部落へ出る計畫であつた。午後の四時乃至五時まで行進を續け、その日の道路の狀況次第で、一日六十乃至七十支里を後にする豫定であつた。番嘔を出發する時はその夜の宿營地が何處になるか見當がつかず、たゞ成行に任することにしてゐた。然るに番嘔で新たに傭入れた數人の苦力は次の部落たる合剌がその夜の宿であると早合點してゐたらしかつた。然し此處に着いたのは未だ正午頃のことで、その儘此處で無爲に過すのは勿體なく、前進を促したところ、彼等は何時の間にか姿を消し、我々がそれと氣付いた時には既に歸つて了つてゐた。改めて此處で苦力を傭ひ、出發を翌朝まで延ばす氣にはなれなかつたので、置き棄てられた荷物はまた一同に分配し、余自身もその一部を脊負ふて行くことにした。折柄、部落の者は總て耕地へ出拂ひ、僅かに一人の老人が殘つてゐたが、我々は此の老人の助けをも借りて行進を繼續した。雨の降り續くつる〳〵の山道を遮二無二急いで行くのであつたが、仲々の嶮路で、あたりは強い北風の吹き曝らす荒涼たる禿山であつた。强行軍に疲れ果て、漸く登り着いた峠の上には寒い濕つた北風が吹き募つて居り、いかにも惡性の風邪に冒されさうな狀況であつた。正午頃になると、再び霧が高地帶一面に立ち罩め、その後嶺門の支那人部落へ出るまで絶えず附き纏ふて離れなかつた。

丹拿門の部落へ着いたのは夕方五時頃であつた。此處に着いて最初に眼に着いたのは、部落民の服裝の貧弱なことで、此の點番嘔のそれと著しい對照をなしてゐた。此の日の行程は嶮路であつたに係らず下り道が多かつたので、割合に行程が捗つた。夜に入つていよ〳〵强烈な雨となつたが、嶺門まで未だ二日の行程が殘つて居り、心細い次

第であつた。今度の旅行中、此の邊が最も慘憺たるもので、部落は汚く、宿も食物も淺間しい限りで、その上絶えず雨が降り續き、同行の苦力等さえ不平を訴えはじめ、一刻も早く支那人部落へ辿り着きたいと戀ひ焦れる有樣であつた。

翌日の行程も略々同樣の狀況に終始した。地形は相變らず殺風景で、高い草に蔽はれた丘陵をなし、樹木と言つては、あちこちに桑の樹が立つてゐるだけであつた。途中で遭ふ男女は大抵また支那服を着けてゐたが、勿論明らかに黎人であつた。

漸くにして新市に辿り着いた時は一同全くのづぶ濡であつた。此處の宿も同じく慘憺たるものであつた。新市は數十年前に開かれた町で、住民は黎人と支那人が半々位であつたが、石造の家屋も多數あり、再び文明に近づいたことを思はせるものがあつた。

此處から嶺門まで最早や僅かに四十支里足らずであつたので、翌朝の出發は何日になくゆつくりし、九時頃になつて漸く宿を出た。嶺門に着いたのは、然し既に夕方であつた。途中は相變らず雨、霧、及び泥濘の路で、遙かに嶺門の町の屋根を見た時は全く救はれた思ひがした。

嶺門の町は名稱通り「山岳地帶の門戸」をなしてゐた。卽ち黎地の前山に位置し、嘉積、陵水と共に黎地に對する主要集散市場の一をなすものである。町は小さく、到着した時が丁度鬱陶しい夕方であつたせいもあつて、町の光景は寂しく慘なものに思はれた。黎地に對する支那の統轄官署として此處に撫黎局なるものがあるが、その支配は微々として甚だ振はない實情にある。此處の宿も甚だ粗末なもので、辛じて休息の取れるだけのものであつた。

嶺門——海口

嶺門は定安から百八十支里の距離にあり、一般に二日の行程とされてゐる。然し同行の苦力等は支那人部落に這入つてからは最早や旅程を急がうとせず、二日で定安に至るといふ計畫に對しても同意を示さなかつた。

第一日は途中坡木、南路を經て、屯昌に宿ることゝなつた。南路は可なり賑やかな町であつた。なほ此の邊には檳榔椰子が繁茂してゐた。嶺門の町に近く黎母嶺といふ一つの連山があつたが、この山地にも矢張り黎族が住んでゐた。此處の黎族は服裝、習慣共に他の黎族に比して可なりの相違が見られ、殊に女の文身は獨特のものであつた。

二日目には山馬、新興を經て新吳へ着いた。新吳は鋪前江上流に臨み、通常は海口への舟便があるのであるが、丁度此の日近所に芝居がかゝつてゐたので、舟を出さうといふ者がなく、止むを得ず翌朝を待つて定安まで行くことにした。

新吳は小さな部落で、宿屋さえもなく、我々は一軒の私宅に宿を借りた。三月六日朝五時此處を出發し、同九時には定安に到着した。然るに此處でも丁度芝居がかゝつてゐて、舟といふ舟は總て貸切りの狀態であつた。一度芝居がかゝると、近隣から數千といふ人々が押しかけて行くのが、此の邊の土地の習慣となつてゐた。可なりの苦心をして、漸く一隻の舟を雇ふことが出來たが、此の日は競爭者がないので、海口まで十三シリングといふ可なり高い賃金を吹きかけられた。普通海口通ひの舟の賃金は百五十文（＝Kiaseh）、貸切りで四シリング乃至六シリングであるから、可なりボラれたわけである。兎に角、値段のことなど言つてゐられぬ場合なので、彼等の言ひ値を出すほかなく、正午頃になつて漸く舟が出たときは、全く助かつたやうな氣持であつた。

可なり寒い一夜を河上に明かし、三月七日の朝、二十二日ぶりに海口に歸り着くことが出來た。

結尾

旅行の經過は概略以上の通りである。次に沿道の一般狀況、資源及びその開發可能性に就いて二、三の附言をなして、此の報告を了へることゝする。

此の島を旅行する者の得る一般的な印象は、土地の豐饒なるに拘らずその開發が殆んど行はれてゐないことである。各部落の周圍には數哩に亘つて相當開墾されてゐるところもあるが、部落に遠い地方になると、數時間の行程に及ぶ未開墾の平らな草原が屢々見られるのであつて、かういふ處では僅かに水利の便ある低地に少しばかりの耕地が散見されるのみである。此等の土地は勿論非常に豐饒で、僅かな勞力で以つて豐かな收穫が約束されてゐる。つまり海南には開墾可能の土地が耕作に從事し得る人口に比して非常に過剩を示してゐるこの結論が得られるわけである。

數百年以來支那の支配下にある海南島に斯くの如き現象を見るのは、一寸不思議なことに思はれる。一般支那人にマルサス主義の知識のないのは勿論である。黎人と支那人間に從來行はれた鬪爭といふ事實を以つてしても、此の現象の說明とはならないやうである。卽ち未開墾地の最も多いのは、北部平野であるが、此の平野では黎人の被害を蒙つたといふ事實は一度もなく、從來最も不安な狀態に置かれてあつた南方海岸地方が却つて最も良く耕作されてゐる實情である。さうすると、どうしても他にその原因を求めねばならぬ。以下その二、三に就いて簡單に言及して見たいと思ふ。

一般に島國の住民が大陸の住民に比して海外移住の觀念に傾き易いのは明らかであるが、海南人も古くから海外

出稼ぎの風を有し、彼等はシンガポール、蘭領印度、香港あたりの勞働市場に於ては非常に有名な、且又可なり人氣のある勞働者となつてゐる。海外出稼ぎといふことは既に彼等の間に一つの習慣的な制度とも言ふべきものとなつて居り、これに依つて相當の貯えを得、餘生を安樂に暮すといふことが彼等の理想となつてゐるのである。便船毎に彼等はドシ〳〵海外へ出拂つて行き、故郷の海南島は何日までも荒蕪地として見棄てられるのである。勿論、一方では便船毎に歸國する者の數も相當なものであるが、兩者の數を對照すべき確たる統計はない。然し兎に角此等出稼人の故郷へ歸る者は一部限られた者であることは自ら明かである。

此等出稼人中どれだけの數が稼ぎ高を貯えて、その理想を全ふするかは、此處では問題ではないのであつて、注意すべきは此等の成功者が海外に於て得た經驗を歸國後故郷の土地の開拓に利用しようとしないといふことである。此等の出稼人は比較的ボロイ儲けに慣れ、その勞働力を短時日に現金に換ゆることに慣れてゐるので、今度は貯えた金の購買力に物を言はせることが、彼等にとつては最も魅力あるところで、歸國後彼等の專ら念ずるところも、一に「旦那風」を吹かせるといふことに盡きるのである。鋤や鍬を取つて故郷の山野の富を增すといふが如きは、彼等にとつては全く問題外である。耕作の如きは實に彼等の最も蔑視するところで、耕地での勞働が現在の百倍の報酬があつたとしても、結局彼等の此の觀念を變へることは恐らく困難であらう。此の間の消息は全く打算のほかであるとしか思へないのである。

海南では家事にしても、戸外の仕事にしても、主なる仕事は總て婦人が從事してゐる。勞働してゐる女の多いことは、一見して氣付かれるところであつて、朝早く重い荷物を背負つた女が長い列をなして村々から町へ向つて急いでゐるが、軈て彼女等は全く別の荷物を背負つて村々へ歸つて行くのである。暑い處の男は寒國の男に比して怠惰であることは通例であるが、余の經驗に依れば、海南では殊にこれが著しいやうに思はれる。

かうした事情にある海南がその土地を荒廢に任せてゐるのも敢へて異とするに足らないと思ふ。

海南島は一般に「椰子の島」と呼ばれてゐるが、如何にも適はしい呼名であつて、氣候、土壤共に椰子を立派に美しく育成する爲に競爭してゐるかと思へるほどである。然るに海南人は此の折角の椰子を利用することを知らず、飲用に供する以外には僅かに殼を刻んで、小さな茶椀、或は酒杯の如きものを作つてゐるに過ぎない。その他には此の効用多き椰子も此處では殆んど顧みられてゐないやうである。南洋諸島に於ける主要輸出品は總て椰子を原料とする製品であり、海南島の價値ある特產物も殆んど此の椰子に限られてゐるに拘らず、打算に富むと言はれる支那人がその價値を知らず、ヨーロッパ人も之に對して何等の企劃を行つてゐないと言ふことは、寔に意外とすべきところである。

島の產業に對する斯くの如き一般的無關心から推して、その鑛產資源の完全に放擲されてゐることも何等怪しむに足りないところである。鑛產資源の豊富なことは疑ひの餘地なく、南西海岸には現に錫が採取され、西海岸地方には諸所に產金を見てゐる。然し此等の企業は何れも個人的な小規模のもので、その方法も亦頗る原始的なものに過ぎない。

斯くの如く包藏する資源が勿體ない位に放擲されてゐるのであるから、交通機關の整備改善に依つてその商業の繁榮に資することいふが如き何等の施設なきは勿論である。

海南島には街道らしい街道はなく、島内の各都市を結んでゐるのは街道ではなく、全くの「小徑」であつて、海口及び瓊州を基點として島内の各市街へ至る主要路、特に島内の最主要都市嘉積、陵水、及び海口を結ぶ道路にしても總て此の例に洩れないのである。或佛蘭西の地圖には麗々しく "la route mandarine" 官路」と明記してあるが、實情を知る者には全くの噴飯物で、山を越え、谷を降り、或時は平らに、或時は嶮しく、石原を過ぎ、川を渉り或

はジャングルの密林を抜けて、迂餘曲折して行く小徑、これが實に海南の "Via regiu" 「國道」の正體である。

水路も亦之に劣らず閑却されてゐる。海南島には川が多く、可なり大きなものが五つもあるが、普通の地圖には殆んど記入してない。然し此等の川は概して淺く、砂に埋れてゐるが、そのうち二、三のものは手入さえすれば、奥地との交通路として立派に利用し得るに拘らず、大きな船の利用から全く見離されてゐる實情である。然し現在でも「西江舟」程度のものは之を利用し得るのであり、その支流にも短艇程度のものは之を利用してゐる。

斯くの如く天然の交通機關が全く閑却されてゐる關係で、鐵道の建設計畫が屢々問題になり、却つて相當の價値が認められるのであつて、計畫の實現に關して一般に考へられてゐる憂慮も余の見解に依れば根據なきものと思はれる。そのうち最も有望な路線は海口と東海岸の重要都市を結ぶものである。萬州までの線には殆んど峻坂といふべきものなく、只萬州以南に相當山岳の海岸に出張つたものがあるが、これとて勿論越え難い難關ではない。更に若し嘉積―嶺門間の支線が開通すれば、島内の中心地帶は完全に開發さるゝことゝなり、なほ西海岸までの延長線が實現する曉には、全島の物産は總て完全に海岸への出口を得ることゝなるであらう。

然し鐵道の開設、道路、或は水路の改善といふのも、海南の生産力が現狀の如く貧弱なものである限り、何時まで經つても實現の運びに至らないであらう。卽ち現在の如く住民の粒揃り分子が故鄕を見棄て、海外に移住し、その生産の原動力を減殺する習慣が脫せられない限り、大なる島の發展は期待すべくもないのである。余の見るところでは、かうした不利な點以外、海南島が住民の海外出稼ぎに依つて得る利益といふものは殆んど考へられないのである。

以上は支那人の住んでゐる地域に就いての問題であつて、以下黎地に關し二、三言及して此の稿を了ることゝする。

黎地開發の障碍となつてゐるのは、言ふまでもなく山岳地帶から成るその地勢、竝に傳統的な支那人との不和に由來するのである。

黎地の自然に就いては既に能ふ限り忠實に描寫して來たので、此處に再び詳說する必要はないと思ふ。卽ち道路は總て嶮しい山道で、物資の運搬は人間の肩に依るほかないのである。川も所謂山川で、岩を嚙む急流をなし、諸所に瀑布を形成しながら山岳の間を縫つて奔流してゐるので、交通路としては勿論問題にならない。黎地の南部地方には良く植物が繁茂し、その樹相も可なり立派である。なほ此の邊の森の緣邊には野生の茶樹が見られ、殊に五指山の南麓地方一帶には可なりの數が見られた。此の地方に對しては將來有利な取引交通の開ける見込み充分であるが、之に反して北方地方はその地相貧弱にして、開發の見込みは甚だ尠いやうである。

斯くの如き地勢上の難關がある上に、黎人と支那人間の不和が著しく黎地の開發を妨げて來たのは事實である。此の兩者の確執は近來著しく緩和されてゐるが、現在なほ恰も支那文化の征服を恐れるかのやうに、黎地は一般支那人の侵入から堅く閉されてゐる。然し支那人の風俗、習慣の侵入と共に此の頑固なりし黎地の扉も漸次開かれて行く運命にあるのは勿論であつて、歷代の支那將軍が夢想した黎地の征服も、かくの如く今や全く別の方面から完成されやうとしてゐる、―卽ち弓矢、或は近代的な銃劍に依つても開くことの出來なかつた黎地の扉が、緩慢ではあるが、然し更に力强い武器であるところの文化の力に依つて打ち開かれようとしてゐるのである。

海南は古來豐かな島として言ひ傳へられて來たが、上記の如くそれは決して誤りではないやうに思はれる。然し島の實情に關する知識が現在かくの如く不完全である場合、全く反對の意見を有する者のあるのは決して怪しむに足りないところであつて、今後進んで島の精査を企劃する者が出づると共に、その困難な使命の價値が大方の理解と贊助を得るに至らんことを祈つて止まない次第である。

――終――

終